

辻川界限

柳田國男・松岡家頭葬会会報 第5号



平成20年 8月 3日に行われた第29回山桃忌記念講演の様相 正面が講師の吉川壽洋先生

柳田國男と南方熊楠

(財)南方熊楠記念館 理事

吉川 壽洋

引作の大楠

南方熊楠は、慶応三年に和歌山市に生まれました。ちょうど江戸が終わるときです。だから明治の年と、彼の満年齢が合致するので非常に覚えやすいと思います。柳田先生の方が八年ほどお若いんじゃないかと思えます。

……中略……

その南方熊楠と柳田國男先生とは、最後は決裂します。決裂するのですが、非常に上手い具合にいった時期があるんです。それが大事だと思っんです。新しい学問であった「日本民俗学」というのを完成させていくのに、柳田先生が中心になって努力されるわけですけども、熊楠もまたいろんな資料や考え方を提供することによって働きがあったんではないかと思っんです。

三重県の南牟婁郡に阿田和というところがあります。そこへ行きますと、引作という小さな神社があるん

です。この小さな神社に実に大きな楠があるんですね。それはそれは大きな楠です。たった一本大きなのが残っている。その他の杉の木とかはみんな、明治四十何年かの神社合祀の頃に切られたのだと思いますが、一本だけ立派な楠が残っています。その楠のそばに立て札があり、地元教育委員会の名前で、「この楠は、南方熊楠先生と柳田國男先生の努力によって残ったものだ」と、書いてあります。「ああ両者が協力してこの木を保存してくれたんだ。両者のすぐれた協力の結果として、大きな楠が自分の目の前にあるんだ」と思いますと、感動しました。

神社合祀反対運動で、熊楠がいかに努力したかといった下手な話をするよりも、はるかにこの楠一本を見た方が、価値があるし、いろいろ感じる場所があるんじゃないかと思っいます。この二人の協力の結実がこの楠を見ることによって感ぜられるということですよ。

海外の民俗学情報の提供

しかし、そういういい時ばかりがあったわけではないということはだんだんお話ししますが、熊楠がアメリカとかイギリスとかへ行って、自己流でつまり自学自習して沢山の植物の採集品と、沢山の書物からの抜書を携えて神戸港に帰ってきます。本当に蚊帳のような衣装を身に付け、哀れな格好で帰ってきたんですが、資料そのものはちゃんと持って帰ってきたんです。それは、今申しましたように植物の採取結果であり、それから「ロンドン抜書」といわれている横文字で書かれた欧米の書物からの抜書ノートです。何十冊もありますけれども、こういうものを持って帰ってきた。

それ以前、一部はその「ロンドン抜書」とちょうど重なる時期もあるんですが、一高に入りましたとき、その時分は大学予備門といっていました、そのころに始めた抜書もあるんです。その抜書「課余随筆」は十冊はあります。それを見てもみると、この人はこの時代に、英国人等の書いた民俗学の書物を読み始めていることがわかります。

例えば、フレイザーの『ゴールデ

ンパウ』（金枝篇）というのがあります。その原本を彼もあちらに居る間に読んでいます。また、『歴史科学としての民俗学』という有名な本を書いているゴムの『民俗における民族学（エスノロジーの方です）』。それらを柳田さんが後に読むようになるのですが、そういうのを読んでどうかと示唆したのは熊楠の方じゃないかと思えます。「フレイザーを読んだら良いですよ。参考になりますよ」と、熊楠が教えたんじゃないかと。それをちゃんと読まれて、そして立派に「日本民俗学」を樹立するのに柳田さんは活用されたところがあるんじゃないかと思うんです。だから、向こうで熊楠がいろいろと勉強した結果を、柳田先生にも知らせることによって、何らかの影響を与えているのだということ

は間違いのない事実だと思えます。

神社合祀反対運動と二人の出会い

帰国後三年間生活した那智勝浦町での生活を切り上げて、紀伊田辺へやってきました。そこで結婚もし、ちょうど長男の熊弥が生まれた頃に政府が大胆なことを始めるんです。つまり廃仏毀釈に始まる神社合祀という壮絶な施策を展開してくるわけ

です。それに対して彼は必死になって反対します。

……中略……

しかし、個人がやるというのでは高が知れているんです。お金はかかる。エネルギーは要る。学問はほっぽりださないといかんと、彼は非常に苦しい経験をするんです。そういう時に、ちょうど柳田さんに出会うわけです。本当にいい時期に出会うんです。彼、熊楠にとっては渡りに船だったと思えます。

『東京人類学会雑誌』に熊楠が「山神オコゼ魚を好むということ」という論文を発表します。それを柳田先生が読まれ、彼のところにレターをよこすわけです。「非常に興味深いものを読ませていただいた」と、「私もこういうのを発表したことがある。読まれておられなかったら送りますよ」と言ってくるわけです。これが彼らの接触の第一歩だと思えます。その時、柳田さんは、山男というんですか、そういうものの研究を始められていて、地名のことも研究されていたと思うんですが、そういうことについて、資料を提供してくれたらありがたいと言っておられます。「地名については私は何もやっくらんが、山男等に関する資料は持っ

ている。あちこちに散在している状態だけれども、まとまった時間を得ることができれば、それをまとめて書いて送ることができると、熊楠は返信で言っています。

二人の協力関係と決裂

熊楠は柳田さんが要求して来ること、教えてくれと行って来ることに対して応えていく。それに対して、自分が今非常に心を悩ませている神社の合祀問題について、いろんな形で協力が得られることを期待したのだと思えます。

……中略……

接触が始まりました。そしていろいろと知識を提供する。一方の協力も得る。柳田さんという人の偉い所は、まだほんのわずかし交流が始まって期日が経っていないのに、協力をしてやるわけです。引作神社の楠を助けてくれと言ってくると、楠が切られないように、上手に三重県知事の方に手を回して、切られないようにもっていくんです。

……中略……

そうすると一方も恩義に感じて、民俗学樹立に向かって努力している柳田さんに対して、様々な民俗学上の知識等を提供するということをし

続けるんです。そういうことで、数年間は随分両者の交流が続くわけですね。

けれど、上手いかわなくなるのは、まず柳田さんが高木敏雄と一緒に出した『郷土研究』という雑誌です。

……中略……

その『郷土研究』の編集方針が、どうも熊楠には気に入らないところが出てきたんだと思います。

……中略……

いい時代もあったにもかかわらず、最終的に決裂のような形で終わっているのは非常に残念なことです。それは何も一方だけに絶交の原因があるのではなく、一方の変な空想力、そういうものにも原因するところがあるんじゃないかと思います。

柳田國男の南方熊楠評

それにしても、柳田國男という人は偉い人だなと思うのは、戦争に負けてしばらく経った段階で、ちゃんと熊楠という人を最大限に評価しているという事です。昭和二十五年に辰野隆が『近代日本の教養人』という本を編集するときに、柳田さんに南方熊楠について書いてもらって、それに載せているんです。その中に、こんなことを書いてもらえたら死ん

でいても本当に嬉しいだろうなと思われる文章があります。きっと本人は嬉しいですよ。

「非凡超凡という言葉を使えば、このごろの人はやたらに使いたがるが、何かちょっとばかりはた者と変っているという程度の偉人ならば、むしろ今日はありふれている時代といってもよい。現に私なんかの仲間では、骨を折って最も凡庸なるものを、」

平凡ということですか。「見つけ出すところがある」ところが「ここから大事なんです。」「ところがわが南方先生ばかりは、どこの隅を尋ねてみても、これだけが世間並みというもの、ちょっと捜し出せそうにもないのである。七十何年の一生のほとんど」七十五歳まで生きて、昭和十六年十二月二十九日に亡くなるんです。「七十何年の一生のほとんど全部が、普通の人のなし得ないことのみをもって構成せられていて。私などはこれを日本人の可能性の極限かとも思い、また時としてはさらにそれよりもなお一つ向うかと思うことさえある。」

とこんなふうに書いています。こんなふうにも書いてもらうと日本人のチャンピオンみたいなものです。

……中略……

そういうことで、非常に大雑把なことを申し上げましたが、要は両者のこの出会いが、新しい学問「日本民俗学」の成立にいろいろと役立ったんだということ、(中略)いろいろな事があった余儀なく決裂をしたけれども、実際はこのように高い評価を受けて、南方熊楠は本当に満足じゃないかなと思います。

第29回山桃忌記念講演より



いこなし、国内外に多くの論文を発表。日本にミナカタありと世界の学者をふり向かせた。生涯、在野の学者に徹し、地域の自然保護にも力を注いだエコロジストとしても注目されている。



財南方熊楠記念館パンフレットより

講師プロフィール

吉川 壽洋 (よしかわ としひろ)

昭和13年和歌山県生まれ。財南方熊楠記念館理事、国立和歌山工業高等専門学校名誉教授、和歌山県文化財保護審議会委員、和歌山市文化財保護委員会委員、主な著作

『父南方熊楠を語る―財神社合祀反対運動未公刊史料』(日本エディターズスクール出版部)

『神社合祀反対運動と南方熊楠』(『南方熊楠百話』八坂書房所収)

『熊楠の家族』(『ユリイカ』平成20年1月号・青土社)

『熊野の祭り』(『国文学解釈と鑑賞』平成15年10月号・至文堂)

南方 熊楠 (みなかた くまぐす)
(二八六七年四月十五日〜一九四二年十二月九日)
和歌山が生んだ博物学の巨星、柳田國男と並ぶ民俗学の創始者。19歳から14年間アメリカ・イギリスなどへ海外遊学、10数ヶ国語を自由に使

館だより

柳田國男と「笑い」展

「人を楽しませるといふ運動を、
将来の一つの目標として見たい」
（柳田國男著「笑いの本題」・自序より）

今年の秋の特別展のテーマは「笑い」です。お腹の底から笑って、楽しいひと時をお過ごしください。

期間 平成20年10月25日（土）

～11月24日（月・振休）

展覧会2本立て

○播州弁まんが展

（会場）記念館2階講義室
播州弁研究会と漫画家前田賢一氏のコラボレーションによる、楽しい播州弁作品展です。

○吉四六（きつちよむ）さん展

（会場）記念館1階図書室
柳田國男が代表的な笑い話として紹介した、「吉四六話」のかるたが、故郷、大分県からやってきます。

講演会2本立て

○第1弾

日時 平成20年10月25日（土）

13時30分～15時

演題 「笑って笑って健康に」

～世界のユーモア・コレクション

講師 大森 泰氏

（日本笑い学会講師、元産経新聞論説委員）

○第2弾

日時 平成20年11月24日（月・振休）

13時30分～15時

演題 播州弁とユーモア人生

講師 井上 四郎氏

（播州弁研究会代表）

◆講演会参加方法◆

事前申し込みが必要です。必ずお電話かご来館にてご予約ください。会員以外の方は入館料が必要です。

申込みTEL 0790-22-1000

※隣接の福岡町立神崎郡歴史民俗資料館でも、特別展が開催されます。

伊勢大神楽

天照皇大神の御神徳を得て、神楽舞で火神を鎮め、四方を祓い、家々の繁栄、村々の繁栄をお祈りします。当日は、辻川区氏神、鈴の森神社で奉納の舞、次に柳田國男と兄弟の生家を祈り清祓いをし、記念館前庭で獅子舞を納めてもらいます。

ご家族、お友達などお誘い合せの上、多数ご観覧ください。

日時 平成20年11月15日（土）

13時30分から

※雨天の場合は翌日の日曜日

場所 記念館前庭
観覧料 無料



岩田健三郎版画教室

版画家、岩田健三郎氏の指導で、年賀状の版画教室を開きます。丁寧に教えていただけますので、絵の苦手な方でも大丈夫です。

日時 平成20年12月6日（土）

13時30分から

場所 記念館2階講義室

費用 材料代 一枚 百円

持参品 筆記用具、彫刻刀をお持ちの方は持参してください。

彫刻刀をお持ちでない方はお申し出下さい。

申込みTEL 0790-22-1000

※小学生の低学年の方は保護者と共に参加してください。

※当日、「もちむぎのやかた」でもイベントが開催されます。

◆会員募集◆

（柳田國男・松岡家顕彰会は、柳田國男・松岡家の業績や功績を一般に知らしめ、これを後世に伝えると共に、学術文化研究を助成し、教育文化の振興に寄与することを目的として設立された団体です。

・法人会費 一〇、〇〇〇円
・個人会費 一、〇〇〇円

法人・個人の会員を募集しております。ご加入いただきますようお願い申し上げます。

また、本年12月末日に更新時期を迎えられる会員の皆様につきましては、ぜひ、更新していただき、引き続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

※記念館ボランティアも募集中です。

※表紙題字（辻川界隈）は版画家・岩田健三郎氏の直筆です。



（財）柳田國男・松岡家顕彰会記念館

〒六七九-1-3104

兵庫県神戸市福崎町西田原二〇三八-1-1

TEL 〇七九-〇二二-1000

休館日 毎週月曜日と祝日の翌日

入館料 一般 二〇〇円 学生 一五〇円

小人 一〇〇円

開館時間 午前9時～午後4時30分